

竹細工：戸隠の伝統的な竹の工芸品

竹は、少なくとも江戸時代（1603 年～1867 年）の初めから、戸隠で収穫されるようになりました。戸隠の地域は冬には雪が地面を覆い、また標高が高いことで一年中気温が低いため、稲作にはあまり適していないのです。そして江戸時代に徳川幕府への年貢が必要になったとき、戸隠は米の代わりに竹を年貢として納めることを許可されたのでした。

戸隠の山腹に自生する竹の種類は、「チシマザサ」と呼ばれます。このチシマザサの高さは 2m を超えますが、太さは 3 cm を超えることはありません。この竹は特にしなやかで根の部分が曲がっています。これらの特徴により冬の豪雪でも折れることなく、しなやかに曲がります。このため、チシマザサは地元では「根曲り竹」という通称でも呼ばれています。

江戸時代、戸隠の人たちは竹を使用して、農業で使われるふるい分け用のかごなど農具を作っていました。明治時代、日本で養蚕業が盛んだった頃は戸隠では蚕を育てるための大型の籠が作られていました。そして人々は竹で籠やお皿などの戸隠特有の竹細工を作るようになりました。戸隠の蕎麦屋で使われる器もこの伝統技術で作られています。

戸隠の竹は秋から冬に刈り取られます。屋外での仕事が限られてしまう長い冬の間でも、戸隠の竹細工職人は竹細工を作り続けます。これらの職人の工房では、竹の茎は 4 分の 1 に縦に切断され、頑丈な外層が切り取られるのです。この竹の外層は、竹細工に使用される竹の主要な部分です。

また竹は、竹細工に色を加える自然のなめし方の過程で、数年間保管されることもあります。さらに暗く豊かな茶色を作り出すために、竹を煙でいぶすこともあります。

戸隠の竹細工は、その高い耐久性と、職人技に美しさを加える幾何学模様が使われることで有名です。またそれぞれの製品が、材料の調達から加工、制作まですべての生産過程を 1 人の職人が担当することで作られているということで、さらに評価されるようになりました。

1983 年 10 月 13 日、戸隠竹細工は長野県内の他の 2 つの地域の竹細工とともに、長野県知事によって長野県指定伝統的工芸品に指定されました。